

■はじめに

今年の夏は、高知県では 41 度を記録するなど、全国的に暑い夏だったように感じます。

2 学期の初めは、まだまだ暑い日が続くと思いますが、子どもたちの健康管理、とりわけ熱中症による事故防止については、引き続き配慮をお願いします。

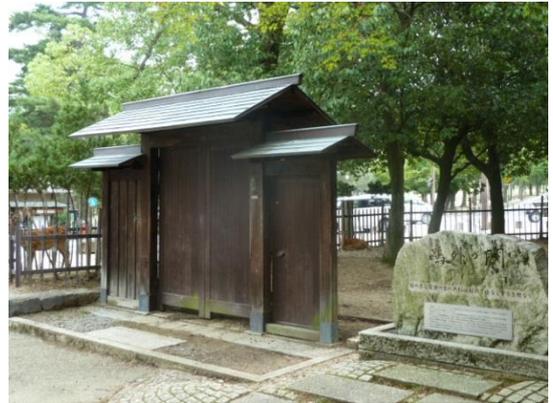
■森鷗外が抱いた奈良への思い

校園長の皆さんは、奈良国立博物館新館の東側に、右の写真の門と石碑があることをご存知でしょうか。

この門は「鷗外の門」と呼ばれています。この「鷗外」とは、皆さんもご存じの森鷗外です。

この門が、なぜ「鷗外の門」と呼ばれるのか、また、鷗外と奈良との関係や、奈良に寄せた思いについての話をします。

鷗外は、大正 6 年(1917 年)から、彼が亡くなる大正 11 年(1922 年)まで、帝室博物館総長兼図書頭(ずしょのかみ)という役職にありました。今でいう、東京・京都・奈良の



「鷗外の門」

国立博物館館長と、宮内庁書陵部の部長を兼ねていたのです。普段は、東京で仕事をしていましたが、職務の一つに「正倉院の開封の立会」があり、大正 7~10 年の 11 月には、20 日間ほど奈良に滞在をしていたそうです。その時の官舎の門が保存されています。

鷗外は、正倉院の開封の立会で 4 回と、イギリスの皇太子の随員として 1 回、計 5 回、奈良を訪れています。その時の記録を見ると、実に精力的に行動していることがわかります。もちろん、公務で来ているわけですから大半は正倉院で過ごしているのですが、公務の合間や、開封が中止になる雨の日には、奈良の各地を回っていたようです。このことは、日記や家族に宛てた手紙などからも伺い知ることができます。家族に宛てた手紙の中には、博物館の略図を描き、宿舎の位置に「パパのいるところ」と書き込んだものもあるようで、門の横にある石碑の説明にも記されています。



「鷗外の門」の横にある石碑

また、公務の合間に各地を巡った印象や感想を短歌に書き溜め、それを「奈良五十首」として雑誌「明星」の大正 11 年 1 月号に発表しています。この年の 7 月に亡くなりますから、これが、彼の最後のまとまった作品となりました。

「奈良五十首」は、京都から奈良へ汽車でやってきた鷗外が、正倉院をはじめ奈良各地を巡り、最後は汽車で去っていく、という内容になっています。その一つ一つを見ると、実に味わい深く、鷗外が抱いた奈良についての思いが伝わってきます。五十首の中に、

「なかなか 定政賢し いにしへの 奈良の都を 紙の上に建つ」

という歌があります。「定政」とは、北浦定政のことで、平城京を復元した地図(坪割之図)を作り、明治以後の平城京研究の基礎となる業績を残した人物です。

定政の作成した地図は、現代の考古学的な成果に基づいて作成されたものとほとんど変わらないほど

の正確さで、その研究を引き継いだ関野貞によって明治 33 年に大極殿跡が発掘されました。それを受けて、棚田嘉十郎、溝辺文四郎が、その保存に立ち上がるのです。



定政の墓

まさに平城宮跡は、こうした人々の活動によって、破壊を免れ無二の歴史遺産として保存されることになりました。この業績を知っていた鴫外は、奈良を訪れた初年度の大正 7 年 11 月 21 日に、念仏寺の定政の墓を訪ねています。幕末当時、ほとんど忘れられかけていた平城京跡を、一人こつこつと歩いて調査し、坪割を復元した定政への畏敬の念があったのでしょう。「なかなか定政賢し」とは、定政の功績を讃えた鴫外の言葉だと思います。

鴫外の五十首の中でも、特に私の心に残っているのは、十首目に詠まれている、

「ゆめの国 燃ゆべきものの 燃えぬ国 木の校倉の とはに立つ国」

という歌です。これは「焼けて当たり前の木造建築物が、天平の昔から建っている。燃えずに残されている。まさにこの国は夢の国である。」と、正倉院を詠んだものです。

鴫外が訪れていた頃の奈良は、「寺が売りに出される」という噂が出たり、実際に百毫寺の多宝塔が買われていたり、文化財が売買されていた時代でした。そんな中でも、奈良には千年の時を超えて受け継がれたものが数多く残っていました。もちろん、正倉院も、その宝物も、多くの災難を乗り越えここまで存在してきていることは鴫外も知っていたでしょうが、自分の足で奈良の古社寺や奈良を思っ活動した人々のゆかりの地を巡ることで、奈良には多くのものが大切に守られ受け継がれていることの素晴らしさを、改めて実感したのだと思います。

こうしたことから、鴫外にとって、奈良は、まさに「夢の国」でした。そして、これからも奈良が「夢の国」であり続けてほしいという願いを込めて、鴫外はこの歌を詠んだのでしょう。

■受け継がれてきた正倉院宝物

「ゆめの国 燃ゆべきものの 燃えぬ国」とはいうものの正倉院は何度も泥棒に入られています。主な災害や盗難の記録を調べてみましたが、1300 年の間には、多くの災難がありました。それを乗り越え、正倉院宝物は現在まで受け継がれています。

この記録の中に、「寛喜 2 年 盗人中倉を焼き、宝物を

盗む」とありますが、この年の夏は、豪雨と冷夏のため大凶作となり、「寛喜の大飢饉」と呼ばれた年

でした。この年に、聖武天皇ゆかりの鏡が 8 面も盗まれています。この盗賊は、盗んだ白銅の鏡を、銀の鏡と勘違いして、細かく碎き銀の塊として京都で売り払おうとしました。しかし、銀ではなかったので二束三文にしかありません。そこで、奈良へ持ち帰り、盗んだことがわからないようにして隠してしまったそうです。

さて、今年の正倉院展では、その時に盗まれずに残った鏡が展示されます。それが「平螺鈿背円鏡（へいらでんはいのえんきょう）」です。今年の正倉院展は 10 月 26 日～11 月 11 日です。皆さんも、ぜひとも、この本物に触れていただきたいと思います。

主な災害・盗難

長元	2 (1031) 年	風による被害
長暦	元 (1039) 年	盗人が蔵を焼払い宝物を盗む
嘉保	2 (1095) 年	南別蔵焼ける
治承	4 (1180) 年	戦火で東大寺消失
寛喜	2 (1230) 年	盗人中倉を焼き、宝物を盗む
健長	6 (1254) 年	北倉の扉に落雷
文安	3 (1446) 年	戒壇院焼ける
永祿	10 (1567) 年	戦火で大仏殿など消失
慶長	15 (1610) 年	盗人北倉の古器類を盗む
天保	元 (1830) 年	屋根大破

■終わりに

「とこしへに 奈良は汚さん ものぞ無き 雨さへ沙に^{すな} 沁^しみて消えゆれば」

鷗外は、奈良の博物館を訪れた知人に、「奈良地方は、雨が降っても土地が砂地だから、泥道にならなくて気持ちがいい。」と語っています。

この歌には、「道をドロドロにしてしまう雨でさえ、奈良では砂地の中にしみて消えてしまう。同様に1300年間受け継がれてきた『夢の国・奈良』を汚すものは何もない」と、正倉院宝物をはじめ、歴史的な遺産を守り受け継いできた奈良という町に感嘆するとともに、それを何とかして未来に伝えていきたいという、鷗外の願いと決意が表れていると思います。

「現実の 車たちまち 我を率て 夢の都を はためき出でぬ」

「現実の車」とは汽車、「夢の都」は奈良のことです。この当時、すでに多くの文化財が失われかけていましたが、奈良は「夢の国」であり続けたのです。「奈良五十首」は「夢の国」から鷗外が去っていくというかたちで、最後を締めくくっています。

鷗外が奈良を訪れてから100年近くが経ちました。鷗外が見た「夢の国・奈良」を守り、未来に伝えていくのは、私たちであり子どもたちです。フェノロサは「今日、奈良に存在せる古物は、独り奈良一地方の宝のみならず、実に日本全国の宝なり。この古物を保存護持するの大任は、すなわち奈良諸君のよろしく尽くすべき義務にして、又、奈良諸君の大なる榮譽なりと。」と訴えています。

フェノロサや鷗外のように、校園長の先生方が、自ら奈良の良さを知り、本物に触れ、自らの言葉で子どもたちや職場の先生方に伝えていってほしいと思うのです。